

## 長期支援で見えてきた地域支援の連携と広がり



生活支援センターあんだんて 主任

社会福祉士・精神保健福祉士 掛<sup>かけ</sup>川<sup>がわ</sup> ちひろ

### ■ はじめに

生活支援センターあんだんて（以下あんだんて）は高槻市より委託を受けて、障がいのある方やそのご家族からの相談をうかがいながら、様々な情報提供や支援を行っています。

子どもの「ひきこもり」が背景としてある80代の親が50代の子どもの生活を支えるという問題、いわゆる「8050問題」が取りざたされていますが、あんだんてが関わったケースでも、高齢で持病のあるご両親と引きこもりの40代の娘さんが同居しているケースがありました。

共倒れになり兼ねないような状態から、あんだんてのサービスを利用しながら1人暮らしができるようになるまでの、長期間にわたる地域の支援機関との連携と広がりについて報告します。

### ■ 経過

平成21年6月あんだんての支援開始時、ご両親と共に住む府営住宅は不用品で埋め尽くされ、ご本人は自室に引きこもり夜は座って寝ていました。20代の頃には、親の援助で单身生活をしては部屋を物で溢れさせ、3度の転居をするものの破綻し、実家に戻った経過がありました。

親への要求は一方的に筆談で伝え、トイレ・洗面も親と会わないように済ませていました。潔癖で身の回りの物や自分自身をもビニール袋で覆い、自分の

膝より下の空間や親の触った物は不潔と感じて触れなくなるため、どんどん物が溜まっていました。

「ご家族の不安の軽減」「ご家族に何かあったときの重大な局面を逃さないために」として、ご本人に会えなくても毎月の家庭訪問を継続してきました。5年経過した平成26年12月に突然お母さんが扉を開けたことでご本人と初対面でき、その後再び会えない期間は続きましたが、手紙を扉の隙間から差し入れるなどしながら、訪問を継続しました。

長年、座位・立位しかとれず、ほとんど入浴もせず足が化膿。リンパ浮腫（リンパ管の流れが悪くなることで起きる手足のむくみ）が悪化して蜂窩織炎（ほうかしきえん：皮膚の傷などから細菌が侵入し、皮膚とその下にある脂肪組織などに炎症を引き起こす）から敗血症（感染症によって生命を脅かす臓器障害が現れる状態）を合併し緊急搬送され、平成28年5月に医療保護入院。ようやく精神科病院につながり、それと同時にあんだんてがご本人に直接関わられるようになりました。

病室でもベッドやその周辺は物で溢れ、全ての物にビニールをかけ、スイッチ・ドアノブ・椅子など共用の物には触れられず、頻繁にお母さんに電話をし、自分の要望をスタッフに伝えさせたり、お金や物を届けさせたりしていました。またお母さん自身も癌が見つかって入退院を繰り返すようになり、お父さんも他界し、親との同居及び親からの経済的支援が不可

能になりました。共同生活であるグループホームを嫌がったため、以前は破綻を繰り返した単身生活をどう支えるかを病院スタッフと話し合い、連携して支援を開始しました。

病棟看護師とは、ゴミまよめの練習・足浴、病棟の洗濯機を使用、作業療法士とは、買い物から調理までの個別の実習など、家事スキルのアセスメントの協力も得られました。また、ヘルパー事業所も、退院前からご本人との関係構築を図ってくれました。やるべきことの優先順位が滅茶苦茶であったり、現実離れした要求をしたりするなど、「本当に退院できるのか」と不安になることもありました。しかし、ご本人の「退院したい」という思いを叶えるために、諦めずに粘り強く関わり続けたこと、また定期的に会議を重ねて、支援の進捗状況の確認、対処・解決方法を検討し、関係機関が一丸となって支援したことで退院することができました。

## ■ 現在の生活

退院時に危惧された通り、物が増え、横になるスペースも徐々に失って、再び座位で眠る状態になっています。

しかし、入院前との大きな違いは、医療や福祉の支援を受け入れていることです。自立的に定期的な精神科通院ができており、あんだんてが同行して病院との懸け橋になることで、整形外科にも通院できています。訪問看護による、足の状態確認や清潔保持のための足浴も受け入れ、足の切断という最悪の事態には至っていません。あんだんての訪問にも応じ、以前よりも自ら意思表示したり、返答もスムーズになったりしています。

また、あんだんての支援で成年後見制度の利用も開始し、お母さんの不安や負担も大きく軽減されました。

## ■ まとめ

現状も物で溢れ、横になって寝るスペースもない部屋で、日中活動や余暇もなく『これでいいのか』と思われるような生活ではあります。しかし、『死なない』『火事・事件をおこさない』『人を傷つけない』という最低限のルールは守ることができています。

また支援者との約束であった、「自身の生命を守るための通院や訪問看護の利用」は継続できています。何より、お母さんの助けがなしでは何もできない状況から、お母さんと離れて他者の支援を受けながら生活できていることは、このうえない成長です。

まさにこれは、法人の理念である『地域に生きる』が達成できている事例であると言えます。そしてこれは、長年に渡り定期的に訪問を続け、沈黙が続いてもご本人の意思を聞き取ろうと面談を重ねた、あんだんての根気強い関わりと地域連携の成果に他なりません。

今回の一連の支援は、退院困難事例に対する病院スタッフの意識改革にも繋がり、退院に向けて積極的に取り組むきっかけになったのではないかと思います。

なお、この事例は、精神科病院入院中の主治医によって、令和元年11月15日発行の『精神医学』に《中高年ひきこもり女性に対する地域移行の1例》として発表されました。

